

第12回 映文連 国際短編映像祭「映文連アワード2021」



会 期：2021年11月29日(月)～12月1日(水)  
 会 場：国立新美術館講堂(表彰式)／ユーロライブ(上映会)  
 主 催：(公社)映像文化製作者連盟  
 後 援：文部科学省／経済産業省／東京都／映像産業振興機構／日本映画テレビ技術協会／日本アド・コンテンツ制作協会／  
 日本ポストプロダクション協会／日本映画撮影監督協会／日本映画テレビ照明協会／デジタルコンテンツ協会／  
 毎日新聞社／日本経済新聞社／朝日新聞社／読売新聞東京本社／映像新聞社／ユニ通信社  
 対 象：一般、学生、映像制作関係者  
 公式サイト URL：https://www.eibunren.or.jp/award2021/index.html

総来場者数(参加数)：900人(国内入場者数(参加数)：900人 海外入場者数(参加数)：0人) ※ライブ配信視聴者含む  
 プレス社数：8社(国内プレス社数：8社 海外プレス社数：0社)

■開催内容

15回を迎えた、わが国唯一の産業・文化関連の短編映像祭「映文連アワード2021」表彰式は、11月29日(月)午後1時30分  
 から国立新美術館講堂において開催し、最優秀作品賞(グランプリ)を始め、32作品の受賞者に賞状とトロフィーを授与した。

「映文連アワード2021」受賞作品上映会は、11月30日(火)・12月1日(水)に渋谷・ユーロライブにおいて開催し、受賞作品  
 32本を7プログラム(「コロナ禍を超えて」、「自然と共に生きる」、「学び生きる私たち」、「コーポレート映像の現在」、「地域発わ  
 がまち・歴史」、「時代を突破する」、「若手クリエイターの表現」)に分けて上映した。

Aプログラム「コロナ禍を超えて」では、〈コロナ禍で創る〉と題して、宮部一通氏(グランプリ『幕内劇場』ディレクター)、鎌田  
 裕一氏(部門優秀賞『ねぶたのない夏』プロデューサー)、馬詰正氏(優秀企画賞『Reboot』プロデューサー)、高橋一生氏(部  
 門優秀賞『西武そごう「わたしは、私。レシートは、希望のリストになった。』監督)がコロナ禍での創作活動等について語った。  
 モデレーターは、映画監督の松本貴子氏。Gプログラム「若手クリエイターの表現」では、〈表現のReborn〉と題して、安村栄美  
 氏(部門優秀賞『WAO』監督)、栗原栄見氏(部門優秀賞『沼山からの贈りもの』プロデューサー)、藤井三千氏(部門優秀賞『Letters  
 どこかで息絶えたかもしれないいつかの私へ』監督)、矢野ほなみ氏(準グランプリ『骨噛み』ディレクター)が演出法や苦労など  
 を語った。モデレーターは映画監督の永田琴氏。

30日夜は、「International Corporate Film Showing 2021」を開催し、ドイツのWorld Media Festival、Cannes Corporate  
 Media & TV Awardsそして今年は2年に一度、ドイツの国際モーターショー(IAA)の時期に合わせて開催されるAUTOVISION  
 AWARDSから初招聘し、合計13作品の企業映像を上映した。昨年同様に来日ゲストを呼べない中ではあったが、監督、プロデュー  
 ー、クライアント等のビデオメッセージを4本上映したことで、充実した内容となった。

■2021年度の新規取り組みとその成果・特色など

前回同様にコロナ禍による人数制限があったため、多くの人に見てもらおう方策として、今回も表彰式の模様を、日経チャンネル  
 (https://channel.nikkei.co.jp) で取材してもらい、ライブ配信を行った。今後も当面アーカイブをしてもらい、視聴機会及び認  
 知向上を図る。また、これも前期同様、トークセッションについては、ブロック編集を施した上でYouTubeの映文連チャンネル  
 にアップ(https://youtu.be/oULe50Eg6yg)、映文連公式ページのトップページからもリンクを貼った。前回は1プログラムのみ  
 をアップしたが、今回は全2プログラムともアップした。



会場の様子



主催者挨拶をする善方会長



グランプリ「幕内劇場」の授与  
(市川海老蔵氏、宮部監督)



記念写真



記念写真